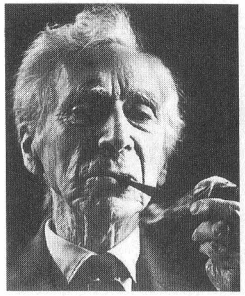
# バートランド・ラッセル

Bertrand Arthur William Russell, 3rd Earl

数学者・哲学者
イギリス

一八七二年五月十八日～一九七〇年二月二日



## 数学と哲学と反戦に情熱を燃やす

バートランド・ラッセルが二十世紀を代表する思想家の一人であることは、疑う余地もない。しかし九十七年のその生涯は、「思想家」という形容の範疇をはるかに超えた広がりと、振幅をもっている。ラッセルは純然たるイギリス貴族の子として、一八七二年五月十八日にウェールズ地方モンマスシャーで生まれた。祖父のジョン・ラッセル卿は、ビクトリア女王の下で首相を二度も務めた実力者であり、父のアンバリー子爵もまた、一度は議会に議席をもった政治家だった。しかしアンバリーは、婦人参政権や産児制限を支持するなど、当時としては極めて急進的な思想の持ち主だったため、政治家としては



不遇のうちに三十三歳の若さで病没。母のケイトもその前年にジフテリアで落命していたため、四歳にも満たなかったラッセルは兄のフランクとともに、祖父母の家に引き取られた。そして、まもなく祖父が死去してからは、厳格なピューリタンだった祖母が、すべての面でラッセルの親代わりとなった。

この祖母の方針で学校には通わず、家庭教師による教育を受けるようになったラッセルは、すでに六、七歳にして、ヨーロッパの歴史に関する私見を百ページにもわたってノートに記述するなど、早熟ぶりを発揮。やがて内向的で孤独な少年へと成長するが、六歳年長の兄から与えられたエウクレイデスの『幾何学原理』によって、思いがけず「数学の面白さ」に開眼する。彼はこの「数学との出会い」について後年、「私の人生において初恋にも劣らぬほどのめくるめくような大事件」だったと語っている。

一八九〇年十月、十八歳のラッセルは優秀な成績でケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに入学、数学と哲学を専攻するようになる。いささか神経質そうではあるが、難解な数学理論をもジョークに変えてしまうほどの機知に富んだこの青年の才能にいちはやく注目したのは、数学講師のA・N・ホワイトヘッドだった。ラッセルはホワイトヘッドに導かれるようにして、ケンブリッジの学者たちとも交遊を深め、その中の一人だったM・E・マクタガートの影響を受けて、ヘーゲル哲学に心酔するようになる。

ラッセルが五歳年上のアメリカ人女性アリスと恋に落ちたのは、大学卒業（一八九四年）の前後のことだった。家系に前例なき「平民との結婚」を嫌った祖母の画策により、ラッセルはいったんはパリ駐在英国大使館員として赴任させられたものの、二カ月後に辞職して帰国。周囲の反対を押し切ってアリスと結婚した後、ドイツ社会主義運動を研究するために夫妻でベルリンに赴いた。この研究成果が一八九六年に『ドイツ社会民主主義』として処女出版された、その翌年、フェロー資格論文として書かれた

『幾何学の基礎』が公刊されたことで、数学者としてのラッセルの名声はほぼ確立される。

いかなる組織にも属さぬ自由な立場で思索活動を続けながら、次第にヘーゲル哲学から離れつつあったラッセルは、一九〇〇年にパリの国際哲学会で、イタリアの数理哲学者G・ペアーノと初めて出会った。そして、ペアーノの研究の重要性から大いなる暗示を受け、「数学と論理学の一体化」すなわち「数学の論理学への還元」というテーマのもとで、師であるホワイトヘッドとの共同研究を開始。ついには十年がかりで、近代論理学や数学基礎論における画期的な著作『プリンキピア・マテマティカ（数学原理）』（三巻・一九一〇～一九一三年）を完成させた。「記号論理学の最初の大体系化」を成し遂げたといわれる本書は、以後の数学界、思想界に多大な影響を及ぼすことになるが、ラッセル自身は本書の刊行開始直後に三十八歳で、論理学と数理哲学の講師として母校ケンブリッジ大学に迎えられた。

それからしばらくの間、静謐な学究生活が続いたが、第一次世界大戦の勃発（一九一四年七月）がラッセルの運命を大きく変える。平和主義者として直ちに反戦運動を開始したラッセルは、徴兵反対同盟の委員となり、良心的兵役拒否者を徹底擁護するための論陣を張るが、それによって告訴され罰金刑を科されたことから、「国賊」視されて大学講師の職を解かれてしまう。こよなく愛したケンブリッジを追われたラッセルは、落胆の日々にあっても信念を曲げることなく反戦運動を続けるが、その二年後（一八年）には、雑誌に発表した文章が治安妨害に該当するとして、今度は半年間投獄された。

第一次世界大戦後の二〇年、革命直後のソビエト連邦を訪れたラッセルは、この新国家の内部に狂信と専制の兆候を洞察して、反共的な立場を明らかにした後、中国にわたり、北京大学でほぼ一年間、講義を行なった。また、第一次、二次の両世界大戦にはさまれた約二十年間はラッセルの著作活動の最盛



期であり、『精神の分析』『物質の分析』など多数の著書が刊行されているが、一方では二二年と二三年の二度にわたって労働党から国会議員選挙に立候補し、いずれも落選。さらに二七年からの五年間は、「児童教育においては児童の欲望を一切抑圧すべきではない」との主張を実践するために、二番目の妻ドーラとともに実験寄宿学校を開設して運営に尽力したが、これも結局は失敗に終わった。

三一年に兄の死により伯爵を継いだラッセルは、四一年に正教授としてニューヨーク市立大学に招請されることになるが、その著書『結婚と道徳』に見られるような「性に対する自由すぎる価値観」に対してアメリカ社会から猛反発が起き、最終的には州最高裁判所の判決によって招請が取り消された。

第一次世界大戦時は不戦主義を唱えて国賊視されたラッセルだったが、第二次世界大戦の際には熱心な対ファシズム戦争支持者となり、その変貌ぶりが賛否両論を呼んだ。しかし、戦後は再び平和運動に挺身するようになり、五〇年には「人間性と思想の自由のための努力が遺憾なく発揮された多方面にわたる意義深い諸著作」により七十八歳でノーベル文学賞を受賞。「往年の反逆児ついに大御所となる」などと評されたが、六一年には座り込みデモで逮捕され、八十九歳の身で一週間の禁固刑を受けるなど、人生の最期に至るまで、原水爆禁止運動やベトナム反戦運動に情熱を燃やし続けた。

数学者、哲学者として早くから名を成しながらも、時代の社会通念に抗した発言と行動ゆえに、生涯にわたって激しい毀誉褒貶を浴び続けたラッセルは、七〇年二月二日、四番目の妻イーディスにみとられながら、北ウェールズの山荘で自然死の如く永眠した。彼は死の数年前に書き上げた『自叙伝』の中で、「三つの単純ではあるが圧倒的なほど強い情熱が私の一生を支配してきた……愛への憧憬、知識への欲求、および人類の苦悩に対するたえがたい惻隠の情がそれである」と述懐している。

**若一光司**